

2.釜石鵜住居復興スタジアムに関する報告

<報告内容>

(1) 調査概要

- 各種インタビュー
- 参考施設の現地調査
 - ・ アシュトンゲートスタジアム
 - ・ キングズホルムスタジアム
 - ・ オガール紫波
 - ・ 北海道バーバリアンズ グラウンド
- 基礎資料・文献を使った調査

(2) 基礎調査のまとめ

- スタジアムならびに周辺施設の基礎インフラ
- 周辺の開発状況について（鵜住居駅周辺・根浜周辺）
- 釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析
- インタビューを通じた洞察
- 国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

(3) 釜石鵜住居復興スタジアム運営計画

(2) 基礎調査のまとめ :釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析

前章にて記載を行った本スタジアムのハードの特徴を中心に、本スタジアムの強み・弱みを、5つの観点から診断を行った。（①ハード、②周辺環境、③ブランド、④人・組織、⑤市場環境）

強み（競合優位性）

弱み

- 自然景観とマッチした開放感のある構造や、座席や柱への木材の使用等、自然を体感できるスタジアムデザイン
- 座席数を6000席有し、三陸沿岸一帯にはない大きな集客能力を持つ
- 国際水準のラグビーの試合ができるハイブリッド芝ならびにピッチサイズを有する
- 各70名収容可能な3つの諸室、RWC水準の2つのチームロッカー、ピッチ周辺の広場等、スタジアムの活用方法の幅を広げてくれる諸機能を有している
- 十分な駐車場スペース
- 耐震性貯水槽貯留槽、災害時ヘリポート、緊急避難場所、避難道など万が一の時の備えを機能として有している

- 常設のビジョンがなく、音響も最低限の設備しか入っていないため、スポーツのイベントでのエンターテインメント作り、スポーツ以外での音楽イベントの誘致などの制限が出てしまう
- おおわれた屋根などによる密閉性が無いため、音が反響したりするようなスタジアムやドームの熱狂感を感じない
- 天候に弱い。特に冬の稼働が難しい事ならびに雨風をしのぐとことができない
- バリケードなど高い囲いが無く開放的な設計ゆえにセキュリティー高いとは言えない
- ホスピタリティースペースなどのキャパシティーには限りがある
- 火器の使用ならびに給排水などの設備に制限があり、飲食を提供するようなイベントの実施には制限がかかる

- スタジアム裏の森、目の前に広がる大槌湾など、周囲が依然豊かな環境に囲まれた立地である

- 市内にホテル等宿泊施設が十分では無く、大型イベントなどの実施時に泊まる場所がない

(2) 基礎調査のまとめ :釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析

強み（競合優位性）

弱み

② 周辺環境

- 鵜住居駅の復旧に伴う三陸鉄道の開通、さらに駅周辺でのメモリアルパーク、津波伝承館、複合施設、体育館などスタジアム徒歩5分のエリアでの開拓が進んでいる
- 根浜側に、サブグラウンドの整備と共にオートキャンプ場などが設置され、また震災以来初の海岸の海開きを2019年に予定するなど、スタジアムを一体になった付加価値提供の可能性がある

- 東京から5-6時間、盛岡・仙台など周辺巨大都市からも2-3時間程度、市内からも車で10分などアクセスが容易ではない

③ ブランド

- RWC2019開催スタジアムとしてのネーミングバリュー
- 新日鐵釜石のV7からはじまり地元チーム釜石シーウェイブスにまでつながる、釜石ラグビーのブランドと歴史
- 復興のシンボルとしての位置づけ
- 防災の学びを次世代につなぐ土地が持つ背景

- 被災地域としての印象に対して、観光地として訪れる場所としての強いブランディングが、その他の有名観光地に比べると釜石市自体がまだまだ発展途上
- 市民にとって、RWC2019の国際大会の会場という意識はあるが、身近に利用可能な公園・スタジアムとしてのイメージがまだない

④ 人・組織

- 復興支援として、または子供みらい基金などを通じてサポート・支援をしてくれる企業・法人のネットワークを持っている
- ホームグラウンドとして使用する地元ラグビーチーム、釜石シーウェイブスを有している
- かまいしDMCや街づくり株式会社など業務において連携ができ、釜石市の稼ぐ力を強め、街を豊かにしていく共通の目的を持った第三セクターが存在している

- 市内にスタジアムなどを含むスポーツ施設の運営ノウハウや、大型の興行を誘致してくる実績や能力を持つ法人や人材がいない

(2) 基礎調査のまとめ :釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析

⑤ 市 場 場 所

強み（競合優位性）

- アウトドアアクティビティーなど自然環境を活かした体験分野は、全国的に需要が伸びてきている
- インバウンド需要、特に地方への需要は、伸びてきている

弱み

- まち自体の人口が減少傾向にあり3万人近くとなっており、高齢化も進んでおり、施設を使う市民のパイ自体が縮小してきている
- ラグビーグラウンドでありながら、市内においてラグビーがNo.1スポーツとして普及をしているわけではない。

<今後のスタジアム運営への示唆>

1. アクセスの難しさと共に、市内の人口の小ささを勘案すると、都市型もしくは街中スタジアム/施設として高い稼働率（ほぼ毎日使われるイメージ）を維持しながら利用者の最大化を図るモデルではなく、運営費などの支出をミニマムに抑えながら、一定程度市外からの利用者を誘致してくる運営の仕方が必要である。
2. スタジアムがホームチームである釜石シーウェイブスを持っているという事実ならびにRWC2019承知も含めたラグビーの歴史を持っているという点は特筆すべきであり、スタジアムの幅広い利活用を模索する中でも、支柱となるブランドとして活用する必要がある
3. 周辺環境との一体化した運営形式の模索は、顧客に対するスタジアム体験価値の向上、管理コストの最低化、地域経済への還元、森と海と空のスタジアムそのもののブランド価値の向上など、様々な観点においてプラスに働くと見える
4. オープンシティー連略を掲げる釜石市において、東京を中心とする企業・法人を何等かの形（研修などでの訪問から協賛社としてまで）でスタジアム運営に巻き込む事が重要である

2.釜石鵜住居復興スタジアムに関する報告

<報告内容>

(1) 調査概要

- 各種インタビュー
- 参考施設の現地調査
 - ・ アシュトンゲートスタジアム
 - ・ キングズホルムスタジアム
 - ・ オガール紫波
 - ・ 北海道バーバリアンズ グラウンド
- 基礎資料・文献を使った調査

(2) 基礎調査のまとめ

- スタジアムならびに周辺施設の基礎インフラ
- 周辺の開発状況について（鵜住居駅周辺・根浜周辺）
- 釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析
- インタビューを通じた洞察
- 国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

(3) 釜石鵜住居復興スタジアム運営計画

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

<インタビューからの洞察：サマリー>

釜石鵜住居復興スタジアムの運営計画を策定に当たり、地元の住民や、市政の責任者・担当者、ならびにスタジアムの今後の運営に当たって関与が期待される民間ステークホルダーなどを中心にディープインタビューを行った。質問の主な項目は、2018年8月19日のこけら落としイベントに際してスタジアムに訪れた際の感想、スタジアムの理想的な活用方法のイメージ、スタジアムに期待する事、スタジアムにあると望ましいと思われる機能・設備、運営に関するイメージなど多岐に渡り釜石鵜住居復興スタジアムの今後についてヒアリングを行った。

上記のインタビューから大きく、下記の7つ項目が共通要素として聞かれた。

- ① ラグビー・釜石シーウェイブスと共に
- ② 地域経済への還元の期待
- ③ 地元のコミュニティの再生の場所に
- ④ 次世代・子供たちのための場所に
- ⑤ 震災の記憶と防災の教訓を受け継ぐ場所に
- ⑥ 森と海と川と自然を楽しむスタジアムに
- ⑦ 世界とつながる場所に

「鉄と魚とラグビーのまち」と標ぼうする釜石市の文化的背景・歴史的背景を適切に捉えた上でのスタジアムのブランディングが必要であるという認識を改めて持った。

市政担当者/責任者へのインタビューの中で、「One for all, all for oneというラグビーの精神は、まさに復興の精神そのものであり、また街づくりの精神そのものでもある」という言葉が聞かれた。この言葉は、上述の釜石市の持つ文化的・歴史的背景の中でラグビーというスポーツが持つ意義を語っている。

本スタジアムにおいても、単にラグビーというゲームスポーツのための活用という枠を超えて、「ラグビー」というスポーツが持つバリューや文化的な価値を十分に活用し、まさにまちづくりに貢献するスタジアムの運営が模索されるべきである。

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ①： ラグビー・釜石シーウェイブスと共に

複数のヒアリングの中から共通の項目として、やはり「ラグビー」がスタジアム運営における中心に据えられるべきであり、地元チーム「釜石シーウェイブス」がそのコンテンツの中心にあるという声が聞かれた。多機能に渡る使用方法が本スタジアムにおいても検討される一方で、中心的な位置づけとしての「ラグビー」「釜石シーウェイブス」がスタジアムのいわば「顔」、「ブランド」として存在することが求められる。

釜石・岩手というのはラグビーを観戦する文化を創造するためのポテンシャルは大きいにあると思っている。釜石シーウェイブスを、釜石鵜住居復興スタジアムで、市民みんなで応援するような文化が根付いていくと良いと思う。
(釜石シーウェイブスチーム関係者)

スタジアムは色々な活用方法の検討ができるが、やはりラグビーでまだまだ活用の余地があるかなという印象。
(市内民間ステークホルダー)

地元の人がワクワクしながら釜石シーウェイブスのホームスタジアムに応援いくようにしたい。そのために、もう少しスタジアムに釜石シーウェイブス色を出してスタジアムツアーをやったり、釜石シーウェイブスのファン感謝祭を矢張りするのはどうか
(市内民間ステークホルダー)

「ラグビーのまち」釜石として、釜石シーウェイブスを中心に、釜石市にラグビーがもっと浸透する取り組みが行われ、釜石シーウェイブスのホームスタジアムとして試合の日に盛り上がってくれれば良い
(市政担当者)

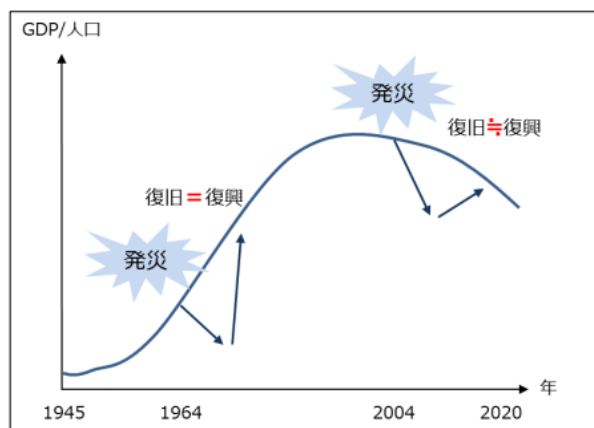
昔ボンソンビーという海外のラグビーチームが新日鐵釜石と試合をしにきて、松倉のグラウンドが超満員になった事を覚えている。RWC2019が終わった後も、より多くの試合が釜石に行われると嬉しい。最近釜石シーウェイブスの試合の観戦から少し足が遠のいてしまっている住民もいるので、いいきっかけになると。
(地元住民)

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ②： 地域経済への還元の期待

2011年の震災から8年近くがたち、地元の住民の方々からも「復興景気の終わり」といった声が聞かれた。平成 30 年 5 月改訂版の釜石市オープンシティ戦略（釜石市総合戦略）の中でも言及されているように、「長期間にわたって経済活動が停滞し、人口減少・少子高齢化の進展する地域においては、そもそも“昨日よりも生活や社会がよくなっていく”と実感すること自体が難しくなっており、地域が自分たちで復興を成し遂げたと感じることもできる、新しい評価軸をつくっていく必要がある。」（左下図）

図表 5 復興とは何か（イメージ図）

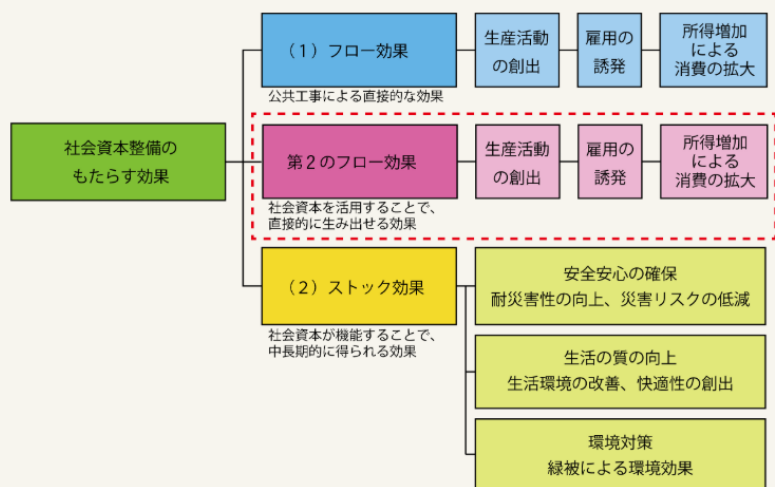


出典：『震災復興が語り農山村再生 地域づくりの本質』p. 62 をもとに釜石市作成

そうした中で、新設された本スタジアムを通じた、地域経済への還元への期待は、様々なところで聞かれた。

社会資本整備のもたらす効果として、公共工事による直接的な効果（フロー効果）だけではなく、社会資本が機能することでそのまちなもたらされる中長期的な効果（ストック効果）に対する重要性が唱えられています。スタジアムを通じて、市民生活が豊かになる事に対する期待や、「ラグビーのまち」としてのブランド価値自体が、スタジアムの存在によって相対的に向上することに対する期待などもインタビューの中で聞かれた一方で、やはりより直接的な地域経済への還元の期待の声も多く聞かれた。そうした観点においては、臂徹氏（大船渡駅周辺地区官民連携まちづくり協議会 タウンマネジャー）が言及する「第二のフロー効果」、つまりは本スタジアムを活用することで生まれる間接的な雇用と消費の増大を意識したスタジアム運営が求められる。

こうした観点においては、紫波オガールのプロジェクト等スタジアム以外の成功事例においても、参考にできる要素があり、後ほど別の章で触れることとする。



社会資本のストック効果とフロー効果。国土交通省社会資本整備審議会計画部会の資料を元に筆者が追記 Figure by Toru HUI

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ②： 地域経済への還元の期待（続き）

（自らが運営する宿に宿泊する）復興関連のお客様がかなり減ってきている。スタジアムができることで全国からラグビー好きが集まったりといった効果を期待したい。
（地元住民）

釜石鵜住居復興 スタジアムができたのだから、釜石・鵜住居・根浜が活性化するきっかけになってほしいと思っている。一方で、本当に経費倒れしないのか、きちんと経済的に自律して運営がされるのかなど不安もあったりする
（地元住民）

復興需要がかなり無くなってきているので、釜石鵜住居復興 スタジアムを活用しながらラグビーを中心に合宿の誘致などはかなり重要になるのではと思っている。また、スタジアムにイベントなどを行う時も、次の日にラグビー体験をコンテンツとして用意したり、+αで楽しめる仕掛けを行ったりすることで、日帰りではなく市内への宿泊を促すなどして地元経済への還元につながるような検討も必要。
（市内民間ステークホルダー）

スタジアムの維持管理のための指定管理料は、市にとって、ラグビーのまちのブランドを創るコストと考えるべきである。ラグビーのまち、釜石の象徴としてスタジアムが機能することは十分に可能であり、地域ブランド開発という視点で、スタジアムの運営を考える必要があると思う。
（市内民間ステークホルダー）

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ③： 地元コミュニティの再生の場所へ

2011年の震災から8年がたち、昨年末（2018年12が圧）には、釜石市内最後の災害公営住宅「浜町復興住宅」（31戸）が完成するなど、仮設住宅から建て再建した住宅に移り住む人も増えている状況の中で、特にスタジアムのある鵜住居地区など津波による被害の大きかった地域などにおいては、「お隣にだれが住んでいるかわからない」（地元住民）という状態が発生しているとのこと。市内の生活応援センターなどが、震災によって失われたそうした地域コミュニティの再生の場所として機能をしている。釜石鵜住居復興スタジアムにおいても、ラグビーやスポーツを通じて、市民が集まり、地元の人々が集まり、交流を公共施設としての期待が、インタビューの中から聞かれた。

新川原町でも震災前の300戸の内100戸くらいが戻って来ている。一方で、仮設住宅から移ったところまでは良かったのだが、隣にだれが住んでいるのか全く分からなくなってしまっている。スタジアムで、町内の運動会が行われたり、おじいちゃん・おばあちゃんが子供たちが運動する様子を見に行くようなそういった場所になれば良いと思っている。

（地元住民）

なかなか家から出る機会減ってしまっている高齢者の方が多い。スタジアムへの散歩などを通じて、外に出るきっかけになると良い

（地元住民）

市民・地域の交流という視点においては、市民の大運動会を企画したり、三陸の沿岸をつなげるようなイベントはぜひ実施をしたいと思っている

（市政担当者・責任者）

釜石市には6-7つほどの漁協があり、昔は青年部が企画して、ソフトボール大会を企画していた李したが、最近はそういった交流もほとんどなくなってしまった。スタジアムに大漁旗を掲げる海の日やカラオケ大会などを企画して、交流の場としてスタジアムを活用したい

（地元住民）

おじいちゃん・おばあちゃんたちとスタジアム周辺のウォーキングイベントやったがかなり良かった。また生活応援センターを通じて、釜石シーウェイブスを応援しに行く企画も行ったが、これも、かなり良いスタジアムに行く企画となった。

（市内民間ステークホルダー）

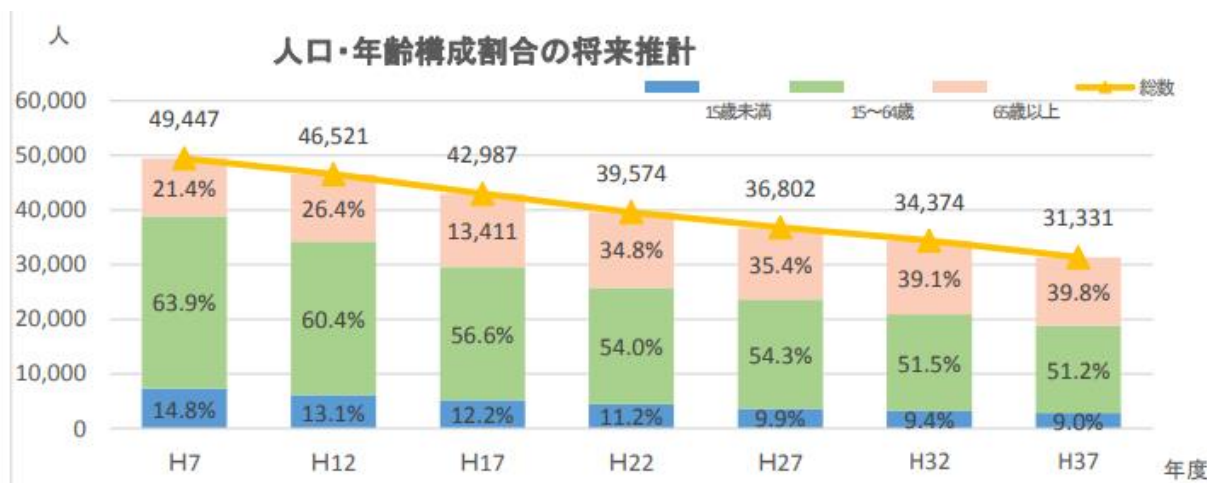
(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察④：次世代・子供たちのための場所に

少子高齢化が進む釜石市（下図参照）において、子供たちが元気に健康的な生活を送れる環境の整備において、本スタジアムが果たせる役割に対する期待の声が聞かれた。

鵜住居小学校、釜石東中学校の跡地を利用して作れたというスタジアムが持つ背景も、踏まえた上で、「船出」「旅立ち」というスタジアムコンセプトにふさわしい、子供たちが楽しく遊べる空間としてのスタジアムの活用の検討が必要である。

また、地元の子供たちだけではなく、市外から本スタジアムにやってくる様々な人との交流の場を創ることで、よりつながり人口を通じた釜石市の活性化につながっていくことが期待される。



出典：国立社会保障・人口問題研究所（平成 27 年国勢調査の数値を基礎として算出） 平成 27 年度国勢調査

一番重視したい対象は子供たち。子供が理解できるような形で様々なものをデザインしたい。次の世代を育てるという視点を持って、スタジアムの活用を考えていく必要がある。もちろん、ラグビーというのがその中心になっていく。

（市政担当者・責任者）

孫がスタジアムが見たいというので、おじいちゃん・おばあちゃんが連れてスタジアム見学に行ったりしている。子供たちがスタジアムで運動する姿をみて、おじいちゃん、おばあちゃんが元気をもらうような機会があると良い

（地元住民）

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察④：次世代・子供たちのための場所に（続き）

ラグビーというスポーツを子供たちに知ってもらうきっかけとなる場所となってくれ
ると嬉しい。今、ラグビーをやっている子供たちというのは、他のサッカーや野球を
やっている子供たちとどうしても隔絶してしまっている印象があるので、もう少しす
そ野が広がるきっかけになると良い

（市政担当者・責任者）

ラグビーのまち、釜石と言いながら、なかなかラグビーをやっている子供たちが少な
かったが、最近はラグビーをプレーする子も増えてきている。スタジアムを気にもっ
とそういう機会が増えると良い

（地元住民）

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ⑤： 震災の記憶と防災の教訓を受け継ぐ場所に

東日本大震災による甚大な被害を受けた岩手県釜石市。本スタジアムは、震災当時、鵜住居小学校ならびに釜石東中学校があった場所であり、被災時に小中学生が日ごろの避難訓練などの学びを活かして手を取りながらとった避難行動は、「釜石の出来事」という形で全国的に知られるところとなっている。

2011年から既に8年経過し、震災の記憶を持たない子供たち、小学生・中学生も増えてくる中で、市内においても震災の記憶と防災の教訓を受け継ぐ場所としてのスタジアムの存在を求める声が多く聞かれた。

また、市内だけではなく、日本全国さらには世界の子供たちにとっても、世界のどのスタジアムを探しても見つからない本スタジアムが持つ背景を活用して、防災に関する教訓を世界に発信する拠点になりうる可能性を持っている。

また、スタジアム周辺地域の開発も含めたエリアマネジメントの視点においては、鵜住居駅周辺に完成するメモリアルパーク、伝承館などとの連携の必要性についても、インタビューの中で聞かれた。

全国から防災教育プログラムとして、人をスタジアムに集めることができるのではないかと。地元の人の中には、津波の時の映像を取っていた人がたくさんいる。地域によって津波の発生の仕方も様々なであったし、漁師たちでも想定できないレベルのものだった。そういった意味では、海のこと、津波のことを良く知っている人々が「伝承師」として語るようなプログラムをスタジアムを中心に展開するのはどうか

(地元住民)

スタジアムにおける防災訓練の日、を年に一度設定をして、避難行動の実践などを実践するのが良いかと思う。10年以内にもう一度大きな地震が来るリスクをきちんと考えなければならない。

(地元住民)

現在、1時間程度で回れる防災ツアーを企画している。そういったコンテンツの中でもスタジアムへの訪問は必ず必要になってくる。

(市内民間ステークホルダー)

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ⑤： 震災の記憶と防災の教訓を受け継ぐ場所に（続き）

3月24日三陸鉄道鵜住居駅がいよいよオープンすると共に、周辺に伝承館、飲食店、祈りのパーク、さらには体育館など様々な施設がオープンする。スタジアムもそれらと連動する形で管理運営されていくのが望ましい。

（市内民間ステークホルダー）

防災に強いまちづくり、惨禍を忘れてはいけない、といった事を象徴する存在としてスタジアムが存在する。

（市政担当者・責任者）

やはり広島の実験ドームなど、県外から、国外からも、多くの人を訪れるに足るものを持っている。もちろん、単純な横比較などすることはできないが、釜石鵜住居復興スタジアムにおいても、きちんとそういった震災の記憶を次世代につないでいくための施設がきちんと整備されており、ラグビーに合わせて訪れる理由を作ってくれるような施設が必要なのではないか。

（スポーツ関係者・釜石出身者）

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察 ⑥： 森と海と川と自然を楽しむスタジアムに（続き）

本スタジアムのインフラの特徴として周囲の自然との一体化や座席への間伐材の使用など含めて自然を感じることでできるスタジアムである。また、釜石市自体が、市内の自然を活かしたエコツーリズム、サステイナブルツーリズムを推進している。2018年には、日本で唯一サステイナブルなツーリズムデスティネーションとしての認定も受けている。[\(http://sustainabletop100.org/\)](http://sustainabletop100.org/)

また、スタジアム体験に自然体験を組み合わせることで、前述の地域経済への還元といった側面にもつながっていくことの期待も聞かれた。

釜石は豊かな森に囲まれており、林業のための豊富な資源を有している。復興需要が弱くなっていく中で、スタジアムやRWC2019を通じて、木材を使った様々な収益機会を模索したい。林業体験など東京の法人からの受け入れなども行っているため、スタジアム運営などと連携しながら進めていきたい。

（市内民間ステークホルダー）

スタジアムは、森・海・川に囲まれているので、それぞれに注目したイベントの日を作ってもいいかもしれない。川は鮭の遡上やボート下りなど。海は、子供の日は漁師の日ということで、大漁旗を山に伝統的に掲げていた。それにちなんで、スタジアムに多くの大漁旗を掲げて、漁師さんたちが集まる、漁師体験しに来た子供たちが集まるイベントなどを実施しても良いかもしれない

（地元住民）

釜石スタジアムは、ロゴに表現されているように、森・海・川など自然に囲まれているスタジアム。スタジアム以外にも橋野の鉾山、根浜、箱崎など、釜石全体での観光資源をアピールする中にスタジアムを組み込んでほしい。

（地元住民）

(2) 基礎調査のまとめ：インタビューを通じた洞察

インタビューからの洞察⑦：世界とつながるスタジアムに

本スタジアムのこけら落としイベントの際に、地元の高校2年生の洞口留伊さんが読み上げたキックオフ宣言の中に「そして、このスタジアムは、完成した。そして、釜石は、世界とつながる。」といった言葉があったように、このスタジアムならびにラグビーというコンテンツを通じて、釜石は世界に対して認知され、また多くの方が海外からも訪れることになる。

インタビューの中でもそうしたことへの期待の気持ちと共に、RWC2019大会以降もそうしたつながりを継続させていきたいという声が聞こえた。

世界大会がくるんだよという事、またラグビーを通じて、釜石ならびに鵜住居自体も色んな方々に知られるようになっていっていることを、とても良いことだなと感じるようになってきている。

(地元住民)

市としても、RWC2019大会以降も見据えながら、釜石が世界とつながっていくという事を意識してスタジアムの活用を考えていきたい

(市政担当者・責任者)

1億円の寄付をしてくれたフランスのデューニレバンヌ市は、RWC2023フランス大会までに、アマチュアラグビーの世界大会を運営することを企画していると聞いた。ぜひ、そういった取り組みが釜石でもできると良いと思う。

(市政担当者・責任者)

2.釜石鵜住居復興スタジアムに関する報告

<報告内容>

(1) 調査概要

- 各種インタビュー
- 参考施設の現地調査
 - ・ アシュトンゲートスタジアム
 - ・ キングズホルムスタジアム
 - ・ オガール紫波
 - ・ 北海道バーバリアンズ グラウンド
- 基礎資料・文献を使った調査

(2) 基礎調査のまとめ

- スタジアムならびに周辺施設の基礎インフラ
- 周辺の開発状況について（鵜住居駅周辺・根浜周辺）
- 釜石鵜住居復興スタジアムについての基礎的な分析
- インタビューを通じた洞察
- 国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

(3) 釜石鵜住居復興スタジアム運営計画

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

<国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察: サマリー>

釜石鵜住居復興スタジアムの今後の運営を検討するにあたり、参考にした諸施設・スタジアム（英国・キングズホルムスタジアム、英国・アシュトンゲートスタジアム、北海道バーバリアンズグラウンド、オガール紫波）の視察を下に、本スタジアムにおいて参考にできるポイントを抽出した。

① ホームチームがそのスタジアムの「顔」となる

スタジアムとしての最大の特徴は、釜石シーウェイブスというホームチームを既に有していることにある。国内の多くのスポーツ施設において、明確なホームチームと呼べるものを持っていない施設は多い。新日鐵釜石ラグビー部の歴史的な背景も含めて、大いに活用できる資産である。現時点でのスタジアムのハード・デザインでは、このブランド価値が十分に表現されていない可能性があり、今後の検討が必要

② 協賛を通じた収益化

本スタジアムの収益席の安定、自律的な運営という観点においては、外せない項目。一方で、協賛看板の露出機会や、スタジアムへの訪問者数といった看板の価格を決めるファクターとなる要素において、それほど強いものを持っていないため、設定できる価格にはかなり限度もある。

釜石シーウェイブスの協賛スポンサーとの連動性、子供みらい基金の寄付企業との関係性、企業研修などを誘致している諸団体（かまいしDMC、森林組合）などとの連携等を検討する必要がある。

③ 広場（滞留スペース）の様々な活用方法

本スタジアムの特徴として、ピッチ周辺に十分活用可能なスペースが存在する。また、スタジアム区域を広げて周辺地域まで捉えると根浜海岸側には市民だけではなく様々な人がBBQなどを楽しめる空間が広がっている。エリアマネジメントの視点で、どのようにピッチ以外の広場・空間を活用するか、更なる検討が必要

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

<国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察: サマリー> (続き)

④ 包括的なコミュニケーションポイントの設計を通じて「まちのシンボル」を創っていく

スタジアムのハード・施設の利活用を考えるだけではなく、ウェブを通じた市民ならびに潜在的な利用者・訪問者に対する発信、スタジアムロゴの商品化などを含むブランド活用、スタジアムで行われる各種イベント、つまりはスタジアムにとってのコンテンツの考案や、そのための市民参加型のワークショップの設計など、多層的・包括的に本スタジアムの検討を進めていく必要がある。

⑤ 地元つながるスタジアムに

ラグビーワールドカップという世界大会の会場であり、また地元住民にとってチケット入手が困難な状況などもあり、地元住民にとって訪れるハードルが少し高くなっている。鵜住居地区だけに限らず、釜石全体を、いかにスタジアム運営に巻き込んでいくかは重要なポイントになる。

また、地理的条件においては、釜石市という行政区分に囚われるのではなく、三陸沿岸のスタジアムという位置づけによって、「地元」と位置付ける範囲を少し広げる視点も必要になると思われる。

⑥ 自主運営でコスト低減

大きな収入・収益を見込むことが難しい釜石鵜住居復興スタジアムにおいて、支出を如何に抑えながら自律的なスタジアム運営を行っていくかは鍵になる。

①の釜石シーウェイブスとの密接な関係づくり、ならびに⑤の地元につながるスタジアムといった視点は、スタジアムの活用者自らがスタジアムの管理をボランティアで実施したり、地元住民自らが運営をサポートしたりといったコスト削減にもつながるアプローチとして検討に値する。

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察①：ホームチームがそのスタジアムの「顔」となる

あるスタジアムが地元の人に愛され、そのスタジアムに行く明確な理由を作るのが「ホームチーム」の存在である。スタジアムの壁面、コンコースの壁、座席の色など隅々までホームチームのブランディングが施されている。

また、現在のチームだけではなく、ホームチームが持つ歴史を展示することで、スタジアムを単なるスポーツの観戦空間から、ある種の文化体験の場へと飛躍させることができる。



左側2つの写真は、キングズホルムスタジアムの入り口の写真。

壁面に、ホームチームである「グロスターラグビー」のロゴが大きく掲示されている。このスタジアムに訪れる全ての人にとって、どのチームのホームスタジアムかがわかるようなデザインとなっている。



(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察①：ホームチームがそのスタジアムの「顔」となる(続き)



キングズホルムスタジアム：
ファンが通る通路には、ホームチームのロッカーのようなデザインの壁紙があり、多くのファンが写真を撮れるようになっている



キングズホルムスタジアム：
スタジアム内にホームチームの選手・監督の顔写真入りのパネルが貼ってある。



キングズホルムスタジアム：
諸室内（ホスピタリティスペース）は、壁紙にホームチームのロゴが入っているだけではなく、壁紙全体がホームチームの色で統一されていたり、過去のチームの写真が飾ってあったり、テーブル周りの椅子やナプキンの色まで赤で統一されているなど徹底したブランディングが施されている

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察①：ホームチームがそのスタジアムの「顔」となる(続き)



アシュトンゲートスタジアム:
ファンが通るコンコースの壁
一式にチームの歴史を象徴す
るような記念品を掲示してい
る



キングズホルムスタジアム:
クラブハウス兼パブとして
スタジアムとして併設され
ている建物の壁一面に、ホ
ームチームの歴史が掲示さ
れている



アシュトンゲートスタジアム:
ホームチーム「ブリストル」
の名前が、そのまま座席にも
描かれている

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察①：ホームチームがそのスタジアムの「顔」となる(続き)



茨城県立カシマサッカースタジアム:

スタジアム敷地内に併設されている診療所においても、ホームチームである、鹿島アントラーズのブランドロゴが使用されている。



茨城県立カシマサッカースタジアム:

上記診療所内において掲示された、所属の医師・理学療法士などの掲示ボードなど細かな部分まで、サッカーチーム鹿島アントラーズのスタジアム内施設としてのデザインがなされている。

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察② :協賛を通じた収益化

スタジアムの財務的に健全かつ安定した運営のためには、協賛社の存在が欠かせない。視察対象スタジアムにおいても、スタジアム収入の20-30%程度を協賛収入から得ていた。釜石鵜住居復興スタジアムにおいては、テレビ露出の観点ならびに年間来場総数の観点で必ずしも高額の協賛収入を見込むことは難しいが、一定の収入ならびに企業との継続的な関係構築が可能になるか。



キングズホルムスタジアム:
バックスタンド、上段・中断
・下段全てのスポンサー企業の
看板が敷き詰められている



キングズホルムスタジアム:
メインスタンド、上段・中断
・下段全てのスポンサー企業の
看板が敷き詰められている



キングズホルムスタジアム:
入口付近の床に、スタジアム
に寄付をした個人が、名前と
メッセージを刻めるようにな
っている

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察② :協賛を通じた収益化（続き）



アシュトンゲートスタジアム:
ハイネケンというビールメーカーの巨大な露出・掲示。掲示がある場所にある諸室が「ハイネケンラウンジ」という名称の下で、ハイネケンだけを提供する飲食スペースになっている



アシュトンゲートスタジアム:
ハイネケンラウンジの入り口のハイネケンのロゴ。100名程度が入ることができる諸室となっており、試合日にはホスピタリティースペースとして使われる

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察② :協賛を通じた収益化（続き）

スタジアム及びホームチームの協賛企業も、従来型の看板露出のみのスタイルから、より「パートナー」としてのモデルとして連携を深めている。

スタジアムを、パートナー企業・協賛企業にとっての、新しい技術の実証実験の場所として活用する

福岡 ヤフオク！ドーム:

ソフトバンクが、今年の3月に5Gを用いたVR観戦実験を実施。スタジアムに設置した高性能VRをつうじて、VR空間における実証実験を実施。



(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察③ :広場（滞留スペース）の様々な活用方法

オガール広場を使った 企画提案を募集します

オガール広場で「こんなコトやってみよう！」「あんなコトできたら楽しいよね！」といった企画提案を募集します。

オガール地区の特色を生かし、東・西広場や大通公園を使って、自らが企画の実現を目指す住民や事業者の方であれば、どんなでも応募できます。
審査を経て採用された際は、公民連携室が実現に向けて応援しますので、ぜひ応募ください！

【募集期間】2017年3月24日(金)まで

【応募資格】オガールエリアの特色を生かし、自ら企画を実現しようとする方ならどなたでも
※ 町外の方でも、企業の方でもOKです。

【応募方法】『オガール広場の活用企画提案応募用紙』に必要事項を記入のうえ、郵送またはメール、FAX、フェイスブックメッセージのいずれかでご応募ください。
※ 提出のあった応募用紙等は返却しません。

【応募費用】無料

【実施条件】企画を実施する際は、紫波町交流公園条例等で定められた占用許可申請書を提出いただき、占用料をいただきます。

【審査方法】審査委員が募集期間中、随時審査を行います。また、提案内容によっては、ヒアリングを行う場合があります。

【採用可否】審査終了後、採用の可否を提案者に連絡します。また、審査結果をまとめて、ホームページ等で公表します。



施設内と広場を使って



観光イベント



人前結婚式

応募・お問合せ先

紫波町企画総務部企画課 公民連携室
〒020-3392 紫波町紫波中央駅前 2-3-1
TEL 019-672-6912 FAX 019-672-2311
MAIL town.shiwapp@gmail.com
FB ページ@紫波町公民連携室

オガール紫波：

メインのオガール広場の活用例を、紫波町総務部企画課に対して色んな民間団体が応募できる仕組みを作成

年間20回以上オガール広場にて、イベントが行われている。

水道企業団の行う「水道フェスティバル」、地元のクラフトビールメーカーが行う「ベアレンビアフェスタ」、マルシェなどの各種産直・バザールのようなイベント、ミニライブからヨガまで、様々なイベントが行われている。

また、ルノー社の持ち込み企画の車の展示等、企業が実施するイベントなども広場にて行われている。

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察③ :広場（滞留スペース）の様々な活用方法（続き）



オガール紫波：

メインのオガール広場では、BBQ施設を事前予約をして利用する事が可能。一回の利用が2160円で、年間147回BBQが市民に楽しまれている。

また、食材などは併設する産直で買うため、地元経済へのいわば第二のフロー効果を生み出している。



北海道バーバリアンズ：

グラウンドの横にある広場において、国際大会などが終了したあとにBBQが行われ、参加した選手たちもそのまま参加して食事をとることが恒例のようになっている。

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察③ :広場（滞留スペース）の様々な活用方法（続き）



アシュトンゲートスタジアム:
天高のあるスタジアムコンコースには、試合の2-3時間前から地元の人々が集まって来て、ビールを飲み、交流をする空間になっている。

アシュトンゲートスタジアム :
スタジアム正面の広場には、試合の2-3時間前から、人がごった返しており、ビール・コーヒーを飲んで、時間を過ごす。試合が無い日でも、スポーツの試合があると、大型スクリーンを前にパブリックビューイングを実施



(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

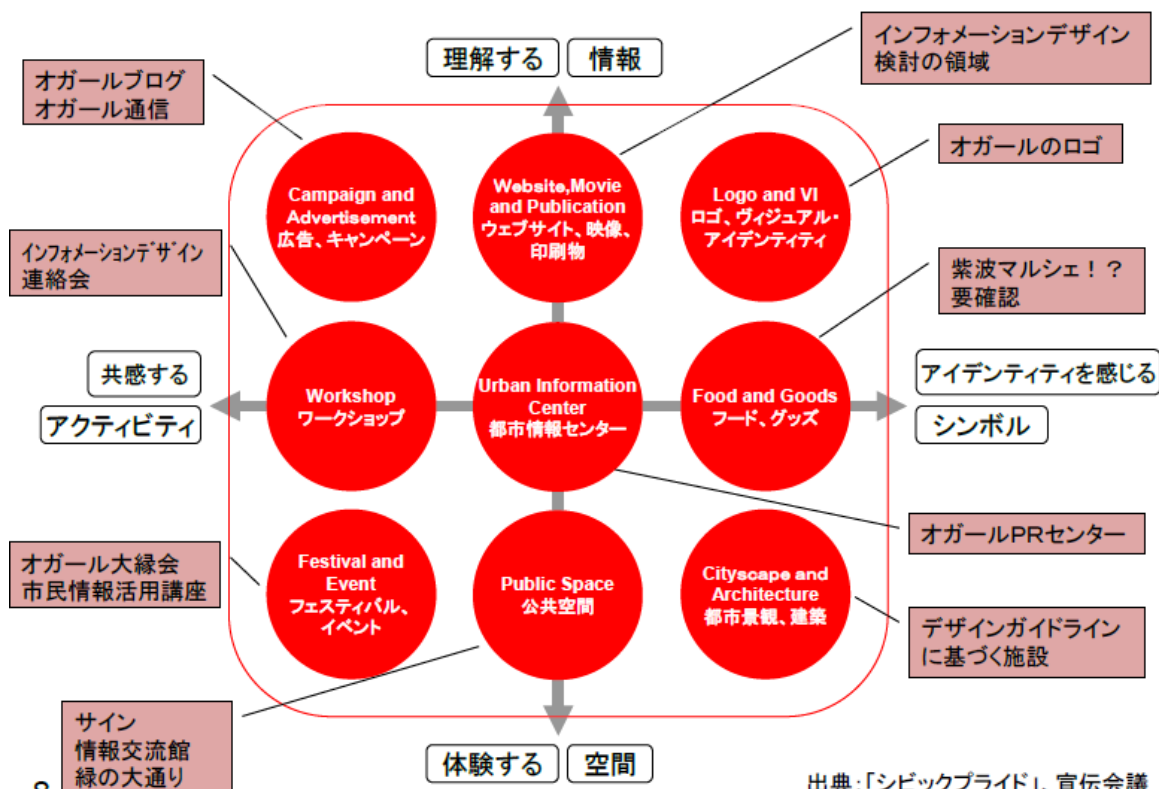
フィールドワークを通じた洞察④ :包括的なコミュニケーションポイントの設計を通じて「まちのシンボル」を創っていく

オガール紫波におけるプロジェクトでは、ハードそのもののその活用という視点だけでなく、施設を一つの「媒介」として、様々な接点でコミュニケーションポイントを設計することにより、その施設に対する市民の愛着を増幅させるという考え方を取っている。

コミュニケーションポイントとしては、施設の「ロゴ・デザイン」から、施設の活用を考える「ワークショップ」、施設の活動記録を発信する「ブログ」、実際の諸施設が持つ「機能」、その諸施設で行われる各種「イベント」まで多様な設計が必要となる。

こうした多様なコミュニケーションポイントを包括的に検討する際にも、軸となるコンセプト・ブランドが必要になる。「Originality comes from the origin（独創性は、そのものが持つ起源から来る）」というアントニオ・ガウディーの言葉に沿うと、釜石鵜住居復興スタジアムにおいては、「ラグビーの歴史」と「震災からの教訓」という極めて明確かつメッセージ性の強い起源、ブランドの軸を持っていると言える。

《参考》都市のコミュニケーションポイント



(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察⑤ :地元とつながるスタジアムに

スタジアムをいかに地元根付かせるか、地元の人々にとって必要なものと思っ
て愛着をいただいてもらえるかは、スタジアム運営の重要なサクセスファクター
の一つ。

参考施設をスタディーすると、具体的に地域の社会課題に対する解決の場を提供
しているものから、まずは地元住民を巻き込むというプロセスを設計しているも
のまで、様々な成功事例が見られた。



キングホルムスタジアム :

スタジアム式に内にあるコンテナ施設では、地元の小・中学校、高校からドロップアウトした子供たちが集まり授業を受けられるスペースがある。チームの元選手やコーチが子供たちと向き合う。30名程度が授業を受けられるスペースになっている。また地元の学校の社会見学・遠足の目的地にスタジアムはなっている。



北海道バーバリアンズ :

地元定山溪において行われている「雪灯路」というイベントにおいても会場としてグラウンドが使用されたり、ホームチームのラグビー選手が運営側をサポートしたりと、街の一大イベントに関わっている。

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

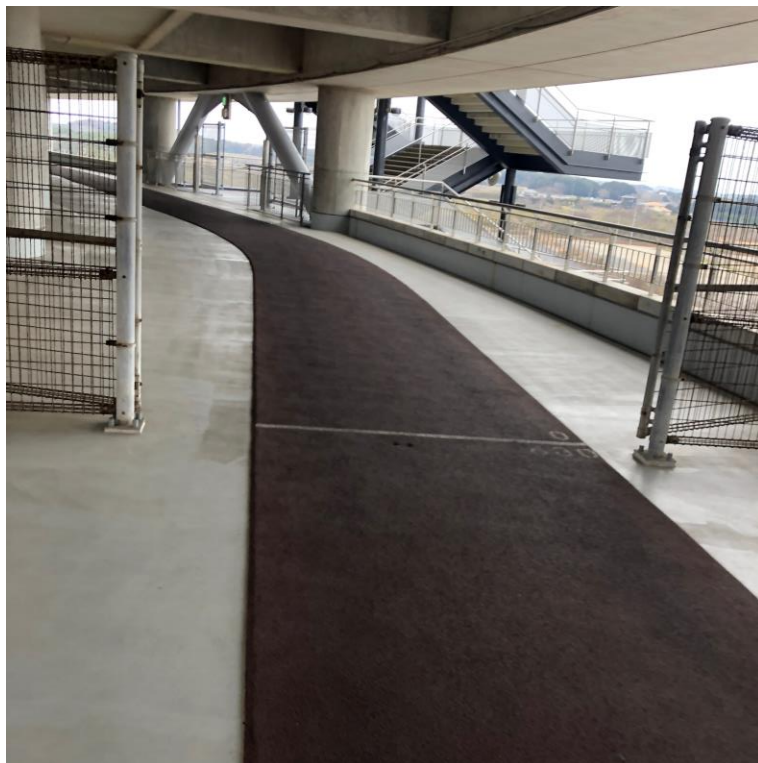
フィールドワークを通じた洞察⑤ :地元とつながるスタジアムに (続き)



茨城県立カシマサッカースタジアム:

スタジアム横のサブグラウンドにおいては、平日朝9時の時点で、40-50名の地元の高齢者の皆さんがグラウンドゴルフをプレー。

→ 本来的なサッカーという使用用途とは別の方法で、空いている時間に有効活用される事例



茨城県立カシマサッカースタジアム:

スタジアムのコンコースがランニングスペースになっており、無料のウォーキングイベントには、18000人が参加する等、スタジアムの新しい活用法

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察⑤ :地元とつながるスタジアムに (続き)



茨城県立カシマサッカー スタジアム:

スタジアム敷地内に、整形外科・リハビリテーション科のクリニックが併設。

スタジアム周辺には、半径10キロ圏内に整形外科は0軒、半径30キロ圏内には、40万人の人口があり、7軒の整形外科のみ存在。

地域の診療所不足に対応。

働く医師は、ホームチームである鹿島アントラーズのチームドクターなどが兼任することで、高い医療レベルも維持。

一日平均180人の診療、年間約5万人の診療を行う



(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察⑤ :地元とつながるスタジアムに (続き)

オガール紫波:

岩手県紫波町のオガールプロジェクトにおいては、平成20年4月施行された、市民参加条例に基づき、積極的な市民参加を促してきた。

平成21年度に計8回の市民参加型ワークショップ(WS)を開いた。「緑の大通り担い手づくりワークショップ」と名づけられた取組みでは、JR紫波中央駅から直結してオガール地区のメインストリートとなる「緑の大通り」のデザイン、機能、管理のあり方などについて、協働でつくり上げていくことを目的としていた。

住民からの意見に加えて、デザイン会議と呼ばれる「外」の有識者の意見ももらえるプロセスの設計を行った。



**紫波中央駅前町地の開発が
始まるようとしています。**

開発事業は、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。

**みんなで創る、市民で創る、
「緑の大通り」の担い手づくり
ワークショップがはじまります。**

「緑の大通り」は、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。

**みんなでアイデアを出し
ーワークショップの開催ー**

まちづくりは、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。まちづくりは、まちづくりの第一歩です。

**第一期 担い手づくりワークショップ
日時：7月22日(水)
15:30~21:00
会場：JR紫波中央駅 駅前
お問い合わせ先
建設局建設課 企画・広報課
電話：019-657-2111**

(2) 基礎調査のまとめ :国内外の参考施設のフィールドワークを通じた洞察

フィールドワークを通じた洞察⑥ :自主運営でコスト低減

北海道バーバリアンズ:

施設の管理の総額3000万円超のほとんどを占めるのか、芝の管理コスト。そのため、ホームチームである、北海道バーバリアンズのスタッフ・選手自らが、芝刈り・水巻などをボランティアで実施することでコストの削減を実現。種まき・肥料・消毒薬など専門的な仕事のみを外注する形としている。

芝の管理を自分たちで実施することで、コスト削減とともに、自分たちのホームグラウンドという意識づけにもつながっている。

また、芝の養生のための水も、通常の水道水ではなく、湧水を活用するなどして、コスト削減に努めている。